# 二十世紀中国哲学研究の詳察と新世紀の展望

李　宗　桂（本間　啓介　訳）

二十世紀が過ぎ去り、新世紀の初年が始まった(1)。この新旧交替の時期に際して、二十世紀の中国哲学研究の曲折した道程を回顧し、その中の成否得失を詳察し、新世紀における中国哲学研究の発展の道筋と先行きを展望することは、新世紀における中国哲学研究にとって、我々が進めている偉大な中華文明を復興するという仕事にとって、思惟水準を高め、精神的境地を高めるという価値を有し、中国文化・哲学の現代的転換を前進させるという意義を有している。

二十世紀の中国哲学研究は、一九四九年を境として、おおむねその前後二つの大きな段階に分けることができる。そして後者はまた、一九七九年を境として、それ以前の三十年と以後の二十年との、二つの小さな段階に分けられる。二十世紀全体を通じ、この百年間、中国哲学研究はひとつの独立した学問として、ひとつの現代的な学問分野として、その萌芽期から形成期さらには一定の成熟期に到る、困難で曲折した過程を経てきた。その間には、顕著な学術的成果と社会的貢献があり、また痛ましい政治的教訓と思惟的教訓もあったのである。

## 一、二十世紀前半

現代的な意味での中国哲学研究は、胡適の『中国哲学大綱（上巻）』（商務印書館、一九一九年）から始まった。それ以前には、すでに謝無量の『中国哲学史』が出版されていた。同著は中華書局から一九一六年に出版されており、より早い時期に書かれている。同著の構成は三部からなり、先秦・漢唐・宋元明清期の中国哲学史を論述している。その内容は諸子学、儒・仏・道の各派およびそれぞれの段階における若干の人物の哲学思想に及ぶ。今日から見れば、同著の内容は確かに比較的淡薄で、質的に精緻というわけでもなく、研究方法は古く、伝統的学術の範疇を超えるものではなかった。しかしそれは「最初の中国哲学史」(2)の名に恥じないものであり、啓蒙的役割を果たしている。謝無量のさらに前には、蔡元培の『中国倫理学史』がある。同書は一九一〇年に上海商務印書館から出版され、初版には蔡振と署名されており、我が国の学者が西洋的学術研究の方法を用いて中国倫理学史を研究した初めての著作である。そこにおいて、中国の倫理学史は三時代、すなわち先秦創始・漢唐継

承・宋明理学の時代に区分されている。孔子から王陽明に至る、二十八名の代表的人物の倫理思想が開陳されており、あわせて補篇のなかで戴震・黄宗羲等の思想を論じたことは、当時の学術界にかなりの影響を及ぼした。勿論、蔡元培のこの『中国倫理学史』は、我々が今日模範としているような中国哲学研究の著作ではない。しかし、そこに用いられている方法、体裁、内容は疑いなく中国哲学史の範疇に属している。とくに一九八〇年代以降に、国内で出版された多くの中国哲学通史あるいは断代史に関する著作が、往々にして思想家また学派の倫理思想について列挙して論述しているという状況を勘案するならば、同書は以後の中国哲学研究の先駆けとなったといっても過言ではない。

さて、胡適の『中国哲学史大綱（上巻）』の出版以後、多様な中国哲学研究の著作が陸続と出版された。二十年代においては、主要なものとしては、梁漱溟の『東西文化及其哲学』（商務印書館、一九二二年）、梁啓超の『先秦政治思想史』（商務印書館、一九二三年）、譚戒甫の『形名発微』(3)、熊十力の『唯識学概論』(4)がある。三十年代の主要なものとしては、馮友蘭の『中国哲学史』(5)、方授楚の『墨学源流』（中華書局、一九三七年）、李石岑の『中国哲学十講』（世界書局、一九三五年）、範寿康の『中国哲学史通論』（開明書店、一九三六年）、梁啓超の『中国近三百年学術史』（中華書局、一九三六年）、銭穆の『中国近三百年学術史』（商務印書館、一九三七年）・『先秦諸子繋年』（商務印書館、一九三五年）、呂振羽の『中国政治思想史』（黎明書局、一九三七年）、湯用彤の『漢魏両晋南北朝仏教史』（商務印書館、一九三七年）、容肇祖の『魏晋的自然主義』（商務印書館、一九三五年）・『李卓吾評伝』（商務印書館、一九三六年）がある。四十年代においては、張岱年の『中国哲学大綱』(6)、杜国庠の『先秦諸子批判』(7)、郭沫若の『十批判書』（群益出版社、一九四五年）、楊栄国の『孔墨的思想』（生活書店、一九四六年）・『中国古代思想史』(8)、趙紀彬の『古代儒家哲学批判』（中華書局、一九四八年）、熊十力の『新唯識論』（商務印書館、一九四四年）、侯外廬の『近代中国思想学説史』（生活書店、一九四七年）・『中国古代思想学説史』（文風書店、一九四四年）、侯外廬・趙紀彬・杜国庠等の『中国思想通史』（第一巻、新知書店、一九四七年）、梁漱溟の『中国文化要義』（路明書店、一九四九年）、賀麟の『当代中国哲学』(9)、容肇祖の『明代思想史』（開明書店、一九四一年）等がある。

上述した多くの成果には、それぞれに特色もあり貢献もある。しかし中国哲学研究に対する影響の大きさという点からいえば、やはり胡適の『中国哲学大綱（上巻）』、馮友蘭の『中国哲学史』、梁漱溟の『東西文化及其哲学』・『中国文化要義』、張岱年の『中国哲学大綱』、楊栄国の『中国古代思想史』等が代表として挙げられよう。梁漱溟・張岱年の著作の影響は誠に甚大であるが、学術界の広範な注目を受けるようになったのは、八〇年代における文化討論の盛り上がりが起こって以後のことである。

胡適の『中国哲学史大綱（上巻）』は、始めて西洋哲学の理

論と方法を用いて中国哲学を解釈し、現代的方法を用いて中国哲学の体系を構築した専門書である。彼は方法論をきわめて重視し、哲学史とは様々な哲学的諸問題に関する「様々な研究法と様々な解決方法」[10]であると考え、ダーウィン進化論の観念に基づいて哲学的諸問題への歴史的考察を遂行するよう主張した。彼によると、「哲学史の第一の任務は、学者をして古今の思想の沿革変遷の端緒を知らしめること」[11]にあり、哲学史は「順を追ってゆっくりと進む思想発達史」[12]である。つまり西洋哲学のパラダイムと形式を用いて、中国哲学史の体系を構築することを主張したのである。馮友蘭はその『中国哲学史』の中で次のように主張している。すなわち、哲学史を研究することは「表面上は体系が無いように見える諸哲学の中に、本質的な連関を見出すこと」[13]である。諸々の哲学者の思想における中心観念とその重層構造、および学派の盛衰と思潮変遷とを注意深く探らなければならない。また、張岱年はその『中国哲学大綱』の中で、問題をもって項目を立て、中国哲学史を宇宙論・人生論・認識論等のいくつかの部分に分けた。それぞれの部分はまたいくつかの問題・範疇に分けられ（同書の副題は「中国哲学問題史」とされている）、とくに中国哲学に固有の範疇・概念に対する整理に重点がおかれ、その歴史的変遷が考察され、さらに中国哲学の特徴が探求されている。この著作は中国哲学の研究対象、およびその論述の仕方において、啓蒙的な役割を果たしている。後年、九〇年代に方立天が出版した『中国古代哲学問題発展史』（上・下、中華書局、一九九〇年）は、この著作の継承・展開といえるものである。

二十世紀前半における中国哲学研究の成果を議論するうえで、馮友蘭が抗日戦争時に執筆し出版した一連の著作「貞元六書」についてふれないわけにはいかない。「貞元六書」とは、馮友蘭が中国の伝統的知識人に特有の憂患意識を発揮して、「中華民族の伝統的精神生活を回顧」した成果である。当時の困窮流亡の生活にあって、「民族の興亡と歴史的変化」は、彼に「多くの啓示と刺激と」[14]を与えたのである。このため、彼は相継いで『新理学』、『新事論』、『新世訓』、『新原人』、『新原道』、『新知言』[15]の六部の書を完成させた。馮友蘭自身のいい方によれば、「『新理学』は道学を『引き継いで』論じたものである」[16]。「貞元六書」が世に出た時には、当時の進歩的人士から猛烈な批判を受けた。今日、中国哲学の理論構造と方法論という次元からみれば、彼の「貞元六書」が積極的な意義を有していることは明らかである。その意義とは、それが馮友蘭の哲学体系の完成を示していることにあり、また中国哲学に従事する者が、伝統哲学と西洋哲学とにおける内容上・方法上の突破を顕示していることにあり、また伝統哲学の現代化および西洋哲学の中国化に関する一条の径路を明示していることにある。まさに「貞元六書」を核心とする新理学の形成と伝播とは、馮友蘭をして抗日戦争期の「中国における影響の最も広範にして、名声の最も大なる哲学者」[17]ならしめたところである。現在に至るも、「貞元六書」は中国哲学研究者にとって必須の参考書である。

ここで二十世紀前半五十年の中国哲学研究を綜合してみるな

らば、およそ以下のようにいうことができるだろう。すなわち、研究者はおしなべて方法論の問題を重視し、中国哲学固有の概念の解明、中国哲学発展の手掛かりの整理、ひいては中国哲学の特徴の顕彰に意を注いできた。さらに、非常に重要な点は、彼らは一様に西洋哲学の理論分析と体系構築方法とを借り、採用し、あるいは承認していることである。他にも、研究者たちがみな深い憂慮の意識をもちながら、中華民族・中華文明の復興のために貢献しようと尽力し、中国哲学史の研究を歴史に対する責任感、時代に対する使命感とに結びつけたことも、またこの時代における中国哲学研究の特徴の一つである。つまり二十世紀前半の中国哲学研究においては、「学説理論の研究討論を重視」したことが重要な特徴であるといえる。哲学史を思想発展の歴史とみなし、哲学史の発展にはそれ自身の法則と特質とがあり、中国哲学は独自の範疇と概念をそなえていると考えたことは、この時代における共通の認識であった。同時に、中国社会・文化の現代的転換に従い、中国哲学は当初から伝統から現代へと転変する過程に直面し参与してきたのであった。この時期に学術界は中国哲学史がひとつの専門的学問であり、現代的意味におけるひとつの学科であるという初歩的な共通認識を得ることになった。しかし、歴史的伝統の影響と実践的条件の限界とによって、中国哲学研究の対象・範囲は、いまだ確定せずに、伝統的学術史・経学的な研究上の考え方が、古今東西の文化史・思想史・政治思想史といった哲学史の研究方法を混在させて互いに争い、多元的に並存し、雑草が繁茂しているかのような様相を呈した。先に述べた、代表的成果の内容・方法と思想的動向が、その主たる証左である。

## 二、二十世紀後半

一九四九年から二〇〇〇年までの半世紀、中国哲学の研究は明らかに二つの段階に区分される。すなわち、一九四九年から一九七八年までの前半三十年と、一九七九年から二〇〇〇年までの後半二十年である[18]。この二つの段階において、中国社会は非常に異なる政治的状況と学術的空気を有しており、中国哲学の研究もまた非常に異なる研究方向と学術成果を擁することとなった。

### （一）前半三十年（一九四九年―一九七八年）

一九四九年以後、中国大陸の政治情勢の変化にともない、中国哲学研究は曲折を経過した。当時の全面的「ソビエト化」という制約を受けて、中国哲学研究は「ソ連モデル」の影響を蒙ることとなった。とりわけ五〇年代から七〇年代にかけて「唯政治思想」の牽制[19]を受けて、一切が政治に従い、一切が政治に同義とされ、一切が政治に解消されることで、中国哲学の研究もまた政治化・単純化・低俗化の道を歩むこととなったのである。このことは、中国哲学史がもっぱら、単純に「唯物主義と唯心主義、弁証法と形而上学」[20]の間の闘争史に集約された点に端的にあらわれている。さらにはそれを政治闘争という次元

に置いて分析が加えられ、「唯物主義は必ずや進歩であり、唯心主義は必ずや反動である」、「階級闘争を綱領として中国哲学を研究し学習しなければならない」[21]とされた。こうして中国哲学の研究は、重苦しく無味乾燥なものとなり、扼腕嘆息すべき悲劇、泣くことも笑うこともかなわぬドタバタ劇さえ少なからず出現したのである。例えば、「孔子は反動階級復活の道具である」[22]、「孔子は反革命のために使われる二枚舌である」[23]、「中国哲学史は儒家と法家の闘争史である」[24]等々がそれである。明らかに、この時期の中国哲学研究は、総体的にみて学術研究それ自身としてのあり方に背いていたし、中国哲学の歴史の実際からも乖離しており、人々の心を痛める状況が出現したのである。しかし、多くの中国哲学研究者の努力と抵抗によって、この時期の中国哲学研究は、依然として相当な成果を挙げたのである。

侯外廬らの『中国思想通史』全五巻六冊の出版[25]は、中華人民共和国建国以後、前半三十年における中国哲学研究の大きな成果であった。それは建国以後初めてのマルクス主義による中国哲学通史であり、中国伝統思想に対して体系的に整理と統合を施した著作である。同書の作者たちは哲学思想・論理思想・社会思想を総合的に研究し、その経済基盤・上部構造・イデオロギーに重きをおいた説明は、中国社会史と思想史の研究を一つに融合し、中国伝統思想および人物に対してマルクス主義的な解釈を与え、一連の斬新な観点を提出した。作者たちはそれまでの研究者からは糊塗されてきた思想家、例えば嵇康、劉知幾、劉禹錫、柳宗元、王安石、王艮、何心隠、方以智等を発掘した。侯外廬らによって異端と称されたこれらの思想家は、二十世紀後半二十年の中国哲学研究において重要視されるようになり、大学における中国哲学の教科書の記載対象となったし、ある者はまた修士論文の研究対象ともなった。現在に至るまで、『中国思想通史』は依然として中国哲学研究に従事する者にとっての重要な参考書であり、またその内容に関連した修士・博士論文制作者にとっても重要な参考書である。

この段階において影響が甚大であった中国哲学の著作としては、さらに、任継愈主編の四巻本『中国哲学史』[26]がある。同書は社会発展の歴史的段階に照らした章立てによって論述されている。先秦を第一巻とし、漢から魏晋南北朝までを第二巻とし、隋唐から明までを第三巻とし、清から五四運動の前までを第四巻としている。第三巻までは「文化大革命」以前に出版され、第四巻は一九七九年に出版された。任氏の著作は歴史と論理との一致に属目し、社会経済の発展と階級闘争・思想闘争との関係に注目し、唯物主義と唯心主義、弁証法と形而上学との関係に注意するものであった。全国の高等教育機関の教材として、広範で深い影響を生み、九〇年代に至っても人民出版社は再版を重ね続けている。注意すべきは、研究的な教材として、それは早くも六〇年代において既に少数民族哲学思想の研究という問題を提起しており、「我が国の少数民族の哲学思想に対して、我々の研究は非常に不十分なものであり、この方面に関する論述はしばらく空白にせざるをえない」[27]と指摘していること

とである。この問題は、近年になってようやくある程度解決された。すなわち少数民族哲学に関する学術会議が招集され、少数民族哲学に関する専門書が出版されるようになったことに、任継愈氏らの問題設定の独自性がうかがえる。七〇年代にはこの教材を基に『中国哲学史簡編』[28]があらためて編纂され、その印刷部数は非常に多く、中国哲学の宣伝・普及にとって積極的な作用を果たした。

この前半三十年の段階において、任著『中国哲学史』の出版と相応じるかのように、馮友蘭が『中国哲学史新編』を出版した。馮友蘭は解放以後、資産階級の知識人として処遇された。彼は自己の思想批判を経て、「マルクス主義的立場・観点・方法を用いて『中国哲学史』を書き直す」[29]ことに努め、その『新編』の第一・二巻は人民出版社から一九六四年六月に出版された。この二冊は学術界の関心を呼ぶところとなった。この他に、馮友蘭はまた中国哲学史史料学の基礎となる『中国哲学史史料学初稿』(上海人民出版社、一九六二年)を出版し、さらにみずからの学術的見解を表明した『中国哲学史論文集』(上海人民出版社、一九五八年)、『中国哲学史論文二集』(上海人民出版社、一九六二年)を出版した。

この段階においてはまた、かつては圧倒的に著名であり、今日に至るもいまだかなり微妙なる人物、すなわち「赤い研究者」として著名な楊栄国の研究成果がある。楊栄国の『中国古代思想史』は人民中国建国以前に成立していたが、正式に出版されたのは建国後の一九五四年(人民出版社)である。六二年には、中国青年出版社が、楊栄国主編になる、陳玉森・李錦全・呉熙釗編著『簡明中国思想史』を出版した。七三年には、同じく人民出版社が楊栄国主編、李錦全・呉熙釗編著『簡明中国哲学史』を出版した。七五年には、同社はその「修訂本」を出版した。楊栄国が五〇年代に出版した『中国古代思想史』は、彼の独特な学術的見解を表明したものである。同書は七〇年代に政治情勢の後押しによって大量に刊行されたが、その内容は一切改変されていない。同書が中国哲学史の伝播と研究に対して果たした作用は、主として肯定的なものであった。八〇年代の文化討論の盛行に至るまで、少なからずの研究者がやはり同書から知識と智慧を吸収していたのである。楊栄国の六〇年代初期の著作『簡明中国思想史』は、学術界の関心を集め、中国思想史を宣伝・伝播する上で積極的な作用を果たした。一九七三年に出版された『簡明中国哲学史』もまた、当時の政治情勢の後押しを受けて、部数もきわめて多く、影響もきわめて広範であった。この著作は、その内容においては、改革開放の新時代になってからも、誰からも異議を唱えられていない。問題なのは、一九七五年に出版された同書の「修訂本」である(『簡明中国哲学史(修訂本)』)。この「修訂本」は江青一派のいわゆる「儒法闘争」観に依拠して「修訂」したものであった。それは、「四人組」が粉砕されて以後、学術界から当然のごとく激しい批判を浴びた。深く考えさせられるのは、楊栄国が「歩調を合わせて」自己を鞭打ち、「赤い研究者」を自任し、毛沢東の信任を得て傲慢になったということである。また馮友蘭が資産階級知

識人・「反面教師」としての存在から、マルクス主義を用いて改心することに努め「新しく生まれかわった」ということである。楊・馮両人は、その政治的立場あるいは学術的見解を問わず、互いに大きく隔たっている。しかしながら、両者の建国以後の学術的経歴はともに政治に利用され、奇形的な政治の圧迫の下で多くの「学術的見解」を意に反して発表したのである。楊栄国は、一九七八年に猛烈な政治的批判と学術的批判の中で寂しく死去し、他方の馮友蘭は『中国哲学史新編』全稿の完成後、一九九〇年に寿命を全うしたのである。両人の政治的悲劇と学術的悲劇は、建国後の前半三十年における中国哲学研究の曲折した道程を映し出している。

この前半三十年の段階においては、中国哲学研究に関する資料もまた多く出版された。中国科学院哲学研究所中国哲学史組と北京大学哲学系中国哲学史教育研究室が合同で編纂した『中国歴代哲学文選』は、一九六二年に中華書局から出版された。この資料は四種に分冊されている。先秦分冊（上・下）・両漢隋唐分冊（上・下）・宋元明分冊・清代近代分冊がそれである。七三年には、毛沢東が提出した「少し哲学史を学ぶ」という要求に応えて、中華書局はこの資料を『中国哲学史資料簡編』と改名して再刊した。

この段階においては、前述の成果の他に、湯用彤の『魏晋玄学論稿』（人民出版社、一九五七年）、張岱年の『中国哲学大綱』（商務印書館、一九五八年、なお著者名は「張宇同」とされている）、熊十力の『原儒』（上・下、竜門書局、一九五六年）、『体用論』（竜門書局、一九五八年）、『明心篇』（竜門書局、一九五九年）、任継愈の『漢唐仏教思想論集』（三聯書店、一九六三年）等の重要な著作が出版され、また郭沫若の『青銅時代』（人民出版社、一九五四年）、『十批判書』（人民出版社、一九五四年）、杜国庠の『先秦諸子的若干研究』（三聯書店、一九五五年）、湯用彤『漢魏両晋南北朝仏教史』（上・下、中華書局、一九五五年）等が再版された。

この前半三十年の中国哲学研究の過程においては、また数多くの激しい学術討論が展開された。その主なものとしては、中国哲学史の方法論に関する討論、『周易』に関する討論、老子思想に関する討論、孔子思想に関する討論、荘子思想に関する討論、董仲舒思想に関する討論等がある。なかでも、馮友蘭・金景芳・蔡尚思による孔子思想に関する研究、任継愈の漢唐仏教哲学に関する研究、関鋒の荘子を中心とする先秦哲学の研究は、学術界の広範な関心を引いたのである。

要するに、建国以後の前半三十年における中国哲学研究は、顕著な成果をおさめたといってよい。人材の育成、研究領域の開拓、研究方法の近代化、独立した学問分野としての建設といった面において、学者達はみな多大で辛い努力を傾注したのである。したがって、前半三十年の中国哲学研究が一面の暗闇であり、歯牙にも掛からないものであったということはできない。しかし、事実を認めるならば、前半三十年における研究には確かに厳重な偏りと過ちが存在していた。すべからくマルクス主義を学習して運用することで中国哲学を研究すべしという

風潮の中では、たとえ新しい観点・方法・内容を有した価値ある論著が出現したとしても、極左思潮の影響と奇形的政治の関与とによって、中国哲学研究は道を誤ることとなったのである。その典型的な例は、五〇年代後期に提出された「哲学史の仕事のなかの修正主義に反対する」というもので、それは異なる学術思想を批判し、さらにはそれを政治批判にまで発展させ、階級闘争という観点に立って中国哲学史および中国哲学史の研究を解釈しようとするものであった。「文化大革命」期の「批林批孔」、「評法批儒」に至っては、さらに荒唐無稽であった。すなわち中国哲学研究が党内の政治闘争の道具となり、ある種の人々にとっては栄誉を求める道具となったのである。ソ連のジダーノフによる哲学史の定義が、教条として奉られ、硬直化して粗暴となり、中国哲学研究は、諸々の哲学者や哲学学派に対して唯物主義、さもなくば唯心主義だと単純に決めつけるものへと変質してしまった。百家争鳴・百花斉放という願いは水泡に帰し、中国哲学研究は厳しい挫折を余儀なくされたのである。

### （三）後半二十年（一九七九年—二〇〇〇年）

二十世紀後半の二十年は、中国哲学が万象更新し、百花斉放した時期であり、二十世紀全体を通じて最も実り多い時期であった。

#### 1、哲学史方法論の突破

八十年代に入ると、政治的混乱の収束、改革開放の進行に従って、中国哲学研究は新局面を迎えた。この新局面の出現の前奏としては、一九七九年に山西の太原で挙行された「中国哲学史学会」の設立大会の期間中における、「中国哲学史の方法論」を主題とする盛んな討論があり、期間後には『中国哲学史方法論討論集』[30]が出版された。その後、新聞・雑誌等で相継いで中国哲学史研究の方法論に関して反省を加える文章が発表された。ソ連のジダーノフの「哲学史定義」を乗り越えることを契機として、学術界では哲学史の定義、対象、範囲、目的、哲学的遺産の継承、唯心主義の歴史的評価、哲学と政治の関係等の問題をめぐって、各人の見解が述べられ、議論が闘わされた。まず三十年近くにわたり支配的であった「両軍対戦論」（唯物対唯心、弁証法対形而上学である。また「対句論」とも呼ばれる[31]）に対して反省が加えられた。討論を通じて、一応の共通認識が生まれた。すなわち、中国哲学史は単に唯物主義と唯心主義との、また弁証法と形而上学との間の「両軍対戦」の歴史であるだけではない。「対句論」によっては中国哲学史の実状を正確に捉えることができないとされた。さらに、ある学者が発表した文章は、「唯心主義の一定の条件下における進歩的作用」ということを述べており、歴史上の「唯心主義」学派と「唯心主義」哲学者に対して、相当程度積極的な評価を与えている[32]。

中国哲学史の方法論に関する研究・討論の盛行の中で、ある学者は三十年間支配的だった「両軍対戦論」に対して、「円形論」を提唱した。「円形論」によれば、哲学史とは人類の認識

の発展史であり、人類の哲学的認識は矛盾と曲折に満ちており、その発展には段階性がある。各段階における哲学の運動は、おおむねすべて思想的な起点と終点を有し、ひとつの首尾一貫した論理的プロセスを形成するのである。この論理的プロセスは、必ず曲折と反復、肯定と否定を経て、偏ったものから完全なものへ、低次からから高次へ、「螺旋状の曲線に似た、またひと連なりの小さな円によって形成されたより大きな円に似たものとして表現される」。このため、中国哲学史研究においては「中国哲学の歴史的発展の中にある固有の『円形』を探求するよう努力」[29]するべきであるとされる。「円形論」の代表的著作は、肖萐父・李錦全主編による、すでに十余万部発行されている『中国哲学史』(上・下)である。今日、人々の「円形論」に対する認識は必ずしも完全に一致しているわけではないが、しかし「円形論」の当時における提唱とその実践は、疑いなく「階級闘争論」、「両軍対戦論」に対する匡正であり、中国哲学研究の進展過程における不可欠の一こまであった。

理論あるいは研究の進路という次元から考察すると、十年におよぶ災厄が収束した後の中国哲学史研究は、方法論の探求を突破の契機としたということができるだろう。この方法論に関する討論の直接的成果としては、前述の太原会議とその論文集である『中国哲学史方法論討論集』の出版、および各新聞・雑誌に発表された論文の他に、北京大学教授張岱年の『中国哲学史方法論発凡』(中華書局、一九八三年)がある。同書は今日に至るまで唯一の、中国哲学史の方法論についての体系的な専門書である。同書は哲学と哲学史、哲学思想の階級分析方法、理論分析方法、歴史と論理との統一の方法、批判継承法、資料整理の方法等に対して、独自の見解を表明している。この他にも、肖萐父・陳修斎による論文集『哲学史方法論研究』(武漢大学出版社、一九八三年)等々がある。同時に、学術界では五十年代に馮友蘭が提出した哲学史の「抽象継承法」への政治的批判に反対して、「抽象継承法」を再評価し、相応に肯定し、非常に高い評価を与える者もでてきた。九十年代に入ってからは、馮友蘭の「抽象継承法」に対して肯定的な評価を与える学者はますます増加した。

注意すべきは、八十年代中期から西洋の学術思潮が大量に中国に紹介されるにつれて、また学術研究領域における「方法更新」・「思想更新」の呼び声が日増しに高まるにつれて、中国哲学の研究領域に西洋の学術研究方法を適用して研究を進めようとする状況が出現したことである。なかでも、代表的な論文としては李沢厚がシステム論の方法を用いて論述した『秦漢思想簡議』(『中国社会科学』、一九八四年第二期)、および若手の研究者が協同論を用いて研究した『相似理論・協同学与董仲舒的哲学方法』[30]があり、学術界の関心を呼んだ。

総体的にみて、八十年代中期以降の、マルクス主義的方法・西洋哲学的方法・自然科学的方法(システム論、サイバネティクス、情報理論、協同論、カタストロフィー理論、散逸構造論等)・文化人類学的方法・考古学的方法等を用いて中国哲学研究を進めるという状況は、それぞれが並立並存するものであっ

たといえるだろう。

## 2、中国哲学の範疇研究の開拓と深化

ジダーノフによる「哲学史定義」という「ソ連モデル」を乗り越えてからは、学術界では如何に中国哲学史研究を深化させるか、という実践上の探求が行われた。まず中国哲学の範疇に関する研究が進められた。ある学者は、中国哲学の範疇および重要な概念の研究を唱導する文章を発表した[35]。北京大学の湯一介が発表した『論中国伝統哲学範疇体系的諸問題』[36]は学術界の幅広い関心を呼んだ。湯一介論文を発表した『中国社会科学』の編集部はまた、この問題に関する座談会[37]を開き、中国哲学の範疇研究を推進した。範疇研究の学術界における幅広い認識と関心がよく表れているのが、一九八三年十一月に西安で挙行された、全国規模の「中国哲学範疇討論会」である。張岱年・王明・馮契・湯一介・方立天・方克立、また重要大学の大学院生、および米国ハーバード大学の杜維明教授等七十人余りがこの会議に参加した。会議後、論文集『中国哲学範疇集』（人民出版社、一九八五年）が出版され、また湖南の『求索』誌に『筆談中国哲学史範疇研究』という題で、張岱年・馮契・湯一介・王明・杜維明らの大会での発言が発表された[38]。その後は、張立文が中国哲学の範疇を研究した専門書を二部出版した。『中国哲学範疇発展史（天道篇）』（中国人民大学出版社、一九八八年）、『中国哲学範疇発展史（人道篇）』（中国人民大学出版社、一九九五年）である。また、葛栄晋が『中国哲学範疇史』（黒竜江人民出版社、一九八七年）を出版し、張岱年が『中国古典哲学概念範疇要論』（中国社会科学出版社、一九八九年）を出版し、蒙培元が『理学範疇系統』（人民出版社、一九八九年）を出版し、張立文が『中国哲学邏輯結構論』（中国社会科学出版社、一九八九年）を出版した。これらによって範疇研究の思惟の射程は伸長し深化したといえるだろう。要するに、中国哲学範疇の研究は、学術界の限界を押し広げ、研究領域を開拓し、研究成果を深化させ、並びに「ソ連モデル」の突破を堅固なものとした。とくに重要なのは、中国哲学の範疇研究という進路が開かれたことは、事実上五十年代以来の学術と政治との混同に対する、また政治を以て学術に代えるという唯政治思想に対する清算であったし、中国哲学研究に従事する者の主体意識が覚醒したということの表れであり、既往の学術研究の思惟経路と観点とに対して、その混乱を収め正道に立ち帰らせるものであったということである。同時にまた、中国哲学史研究の方法論の深化は、方法論に関する討論の論理的な成果であった。しかし、範疇研究の明らかな弱点のひとつとして、研究者が範疇を、孤立した、歴史発展から離れた硬直した概念とみなし、そうして範疇の生気を窒息させてしまうということがある。そのうえ、多くの論者が「誰が誰を愛するのかを論ずる」こととなり、すなわちほとんど全ての中国古代哲学の範疇が、その範疇についての論者がいるところすべて善美を極めた完全なものとみなされてしまうこととなった。こうした弱点は、張岱年氏が上述の中国哲学範疇討論会において、すでに指摘していたとこ

ろである。

### 3、哲学史研究の「純化」と「広範化」

中国哲学研究の範囲のさらなる探求に伴い、中国哲学史と思想史との関係に関する分析が、具体的にいえば哲学史研究の「純化」と「広範化」に関する討論が行われる必要が出てきた。一九八三年十一月、西安で第一回全国中国思想史学術討論会が挙行された。この会議における重要な議題のひとつは、哲学史と思想史との関係という問題であった。それと同時に、この討論会にあわせて、『哲学研究』一九八三年第十期に一組の文章が発表された。そのなかで湯一介、張豈之、閻継旨が自己の見解を明らかにしている。会議の閉会式で、李錦全が行った「思想史と哲学史との連関と区別に関する試論」という課題報告は、『哲学研究』一九八四年第四期に全文発表されている。文章の要点は次のようなものである。思想史研究の対象と重点とされるものは、思想変遷の発展法則の歴史的プロセスである。また哲学史研究の対象と重点とされるものは、思惟発展の内在的論理である。さらに会議においてはおおむね次のような認識に達した。哲学史・思想史・文化史とは、三者が相互に連関した概念と領域であり、その範囲についていえば、文化史が最大であり、次に思想史であり、最小が哲学史である。この会議における討論では、中国哲学研究に対する「純化」は、積極的な意義を有するとされた。その後は、一群の、中国哲学の思惟の特徴、中国哲学の発展経路、中国哲学の哲理化のプロセス、中国哲学の体系等に関する著作が多く出現し、また中国哲学研究という百花繚乱の庭園が豊かになり、さらには哲学史研究における「ソ連モデル」を払拭し、理論上における「極左」思潮の中国哲学研究に対する危害を清算したのである。なかでも、任継愈主編の『中国哲学発展史』と馮契の『中国古代哲学的邏輯進程』は、哲学史研究の「純化」を表したものである。また馮友蘭の『中国哲学史新編』は哲学史研究の「広範化」の例である[30]。

中国哲学の範疇研究に続いては、「思潮研究」が新しい方法となった。この新しい研究方法の主唱者であり実践者であるのは、北京大学教授の湯一介であり、その主著は『郭象与魏晋玄学』(湖北人民出版社、一九八三年)である。この著作は哲学者と社会思潮・学術思潮との関係を緊密に結びつけており、哲学者と学術思潮との相互作用に対して、精緻な解釈を行っている。その後は、楊国栄の『王学通論』(上海三聯書店、一九九〇年)、蕭萐父・許蘇民の『明清啓蒙学術流変』(遼寧教育出版社、一九九五年)があり、これらは異なる角度と時代から、学術思潮・社会思潮と哲学思想の発展との内在関係について、さらに進んだ探求を行ったものである。このような状況は、哲学史研究の「広範化」の表れというべきであろう。

### 4、中国伝統文化の研究

興味深いことに、中国哲学史界が自らを反省し、人々が「哲学の味わい」というものを苦心して築いていたときに、中国全土に及ぶ「文化討論」の波が高まりをみせ、範疇研究・論理構

造研究・体系研究といった「純化」を目指す研究は衝撃を受けた。中国哲学研究の力点とその関心は、基本的には文化研究の方面へと移っていったのである。北京大学の湯一介教授等は中国文化書院を創設して、全国に向けた講習チームを組織し、多くの大型学習叢書を出版し、また『梁漱溟全集』といった歴史的に重要な学術的著作を整理出版した。中国文化書院は中国哲学研究における重要機関となっただけでなく、中国哲学研究者の養成地ともなったのであり、中国と外国の文化および哲学とをつなぐ橋梁の一つとなったのである。

八十年代中期に驟然として起こり、澎湃として発展した文化討論は、中国哲学研究に新たな活力を注ぎ入れた。中国現代化の過程に対する反省を核心として、中国伝統文化の精神的特質、価値観念、思惟方式、理想的人格、美的嗜好、国民の品格、倫理観念、そして中国、西洋両文化の優劣長短、に関する探求が各界の人々の関心を集めたのである。文化討論の中期（八十年代末、九十年代初頭）と、とりわけ後期（九十年代前期）にあっては、物質文化・制度文化両面の問題を探求する者がおり、商業文化、レジャー文化、飲食文化、スポーツ文化、政治文化、法律文化、神秘文化、性文化等に至るまで陸続として探求が尽きることはなかった。しかし人々の関心の焦点となったのは、常に思想文化であり、また多くの学者が説く所の「深層構造の文化」であった。さらに、人々が認識したのは、哲学は文化の核心であり、価値観問題は文化の根本問題であるということだった。こうして、中国哲学研究者は自然と文化討論における先駆者となったのである。張岱年、任継愈、蔡尚思、龐朴、湯一介、李沢厚、王元化、蕭萐父、李錦全、丁偉志、丁守和、馮天瑜、張立文、方克立、および甘陽、劉暁波、『河殤』の作者等は、互いの観点の遠近に関わらず、思想文化がその主たる関心事であったし、また中国哲学の精神的本質と未来への道のりにも関心を注いだのである。すなわち方途は異なっても目指すところは同じであった。中国現代化が及ぼす問題は極めて多岐にわたるため、文化討論中の中国哲学研究は、「純化」しなかったというわけではなく、いうなれば大いに「広範化」したのである。この「広範化」は、中国哲学研究を正常な軌道から逸脱させたのではなく、反対に、中国哲学研究の新たな領域を開拓し、新たな方向を示したのであり、そうして中国哲学研究の成果はいっそう壮観なものとなったのである。この文化討論においては、論者は集中的に中国文化の出口に関する問題を探求した。その代表的な観点としては「徹底再建」、「全面的西洋化」、「西体中用」、「復興儒学」、「中魂西体」、「綜合創新」[9]等があった。これらの異なる観点間の争鳴は、文化研究を深化させることにとって、またその根本的改善にとって、積極的な意義を有していた。同時にそれは、中国哲学研究の領域を開拓すること、中国的気風・気概に沿った中国哲学の研究方法を漸次に形成することにとって、さらに世界の潮流に適合し、また民族の優秀な伝統を保持した、現代における新しい哲学を創造することにとって重要な理論的価値を有するものであった。

九十年代以降、「民族文化を発揚」しようという呼び声が日

増しに高まるにつれても、中国哲学研究の主流は依然として文化研究の方面にあった。なかでも、「国学」研究が重要なものの一つであった。国学を重視し、研究し、科学的に評価し、創造的に転化することは、文学・史学・哲学といった学科の中でも、古典に重きをおく学者の希望であった。こうした希望の現実的な表れとしては、国学の部門区分に対する整理と解釈があり、その代表的なものとしては張岱年主編の『国学叢書』（遼寧教育出版社、一九九一年—一九九六年）がある。同叢書のうち既に出版されているものは、『国学今論』、『漢字説略』、『先秦儒学』、『讖緯論略』、『魏晋玄談』、『宋明理学』、『天学真原』、『岐黄医道』、『明清啓蒙学術流変』等である。この叢書の著者はみな、真の専門家である。本叢書は出版後、学術界および社会の人々に歓迎され、栄誉ある「中国図書賞」を獲得した。この叢書と補い合う関係にあるのが、湯一介主編の『二十世紀中国文化論著輯要叢書』（中国広播電視出版社、一九九五年）である。既に出版されているものは、『国故新知論——学衡派文化論著輯要』、『走出東方——陳序経文化論著輯要』、『時代之波——戦国策文化論著輯要』、『知識与文化——張東蓀文化論著輯要』である。もし張岱年主編の『国学叢書』が、その研究の深さと見解の独自性とを特長とするならば、湯一介主編の叢書は、その資料の詳細さと典型性とを特色とするといってよいだろう。この他にも、馮天瑜等が編纂した『中華文化史』（上海人民出版社、一九九〇年）および種々の関連した叢書、特定テーマ研究の著作、時代別の文化史、論文集等がある。国学研究が関係する内容は極めて広範なものであったが、その関心の焦点は、如何にして中華の優秀な伝統文化を把握・解釈・継承するか、とりわけ如何にして伝統文化と現代化との結節点を探求するかということであり、また中華文化の復興のために尽力するということであった。このため、研究者の学科がどの領域に属するかに関わらず、最終的には「思想文化」という根本的な地平に立脚していたのである。九十年代以降の国学研究は、中国哲学研究の前進にとって、重要な資料の蓄積と思想の創造という価値を有していたというべきであろう。国学研究の中にも学術の名を借りて政治的恣意を謀る者がいたが、それは個々の現象であって、本当の学者は歯牙にもかけなかった。

　中国伝統文化研究の重要な動向の一つとして、研究的な大型学術文化叢書の編纂出版がある。上述した張岱年主編の『国学叢書』の他に、匡亜明主編、南京大学出版社出版の『中国思想家評伝叢書』がある。本叢書は全二百巻を予定しており、既に百巻が出版されている。その論述対象は孔子から孫文までの二千五百余年間の二百六十九人の思想家を含み、その内容は哲学・政治・経済・倫理・文化・宗教・軍事・科学技術等にまで及んでいる。本叢書のうち、既に出版されているものは、大きな社会的反響を引き起こし、中国伝統文化の整理に対して大きな貢献を果たした。しかし、この叢書が扱う範囲が極めて広く、収録する人物が極めて多いということにより、学術界では叢書中に取り上げられる人物が「思想家」であるかどうかという疑問が生じてきた。例えば、湯顕祖・紀暁嵐・許衡・李自珍

のような人物については、学術界に次のような指摘がある。すなわち、たとえ彼らが何らかの思想を持っていたのは当然だとしても、それによって彼らを「思想家」とすることは、おそらく難しいだろうということである。『中国思想家評伝叢書』の他には、李宗桂主編の『「大思想家与中国文化」叢書』がある。この叢書は貴州人民出版社から出版され、国家の「八五」・「九五」重点出版図書となった。同叢書は中国史上の十九人の、民族文化発展に対して重要な影響を与えた大思想家を選び、十七冊の専門書を編纂し、彼らの思想と中国伝統文化の発展との関係を分析することを重視し、中国伝統文化の特質と発展の軌道を示し、これら大思想家の中国伝統文化発展における地位と影響を論述し、学術界が今後より科学的な中国文化史を書くための基盤を提供し、中国伝統文化の現代的転化のために合理的な評価根拠を提供することに努めたものである。その「大思想家」とは、孔子、老子、孟子、荘子、墨子、荀子、韓非子、董仲舒、王充、王弼、慧能、程顥・程頤（合冊）、朱熹、陸九淵・王陽明（合冊）、王夫之、戴震、黄宗羲である。各巻はそれぞれ「〇〇と中国文化」と題されている。『「大思想家与中国文化」叢書』の他に、人民出版社出版の『中国大哲学家研究系列』があり、これもまた比較的大規模なものとなる予定であり、既にその多くが出版されている。選ばれている主要な大哲学家は荘子、孟子、王充、王陽明等である。

総体的には、文化研究の成果は大きなものであったが、しかし問題もまた少なくはなかった。否定することが出来ないのは、八十年代の文化討論には、政治化・空虚化・感情化という現象が存在し、文化研究の客観性と科学性とに影響したということである。とりわけ深刻なのは、功利主義的態度に駆り立てられ、文化討論がある種の人々にとって、名利をあさる道具に堕してしまい、民族文化の現代化を推進する径路ではなくなってしまったということである。しかし、このことによって文化討論が有していた特別な意義を全て消し去ってしまうことは出来ない。この文化討論は、中国社会・文化の近代化の歴史的プロセスと一致するものであった。その価値の中心は、現代的な新しい文化体系の建設を促進することにあった。それは民族文化の深層構造という次元から現代化建設における病巣の所在を考えるものであり、表層に留まるものではなかった。それは事実上はじめての民族文化変革の思想啓蒙運動であり、文化の現代化という時代水準から民族文化の素質を高めるものであった。事実、文化討論においては、理性の声は常に十分に強いものであり、伝統を継承し、伝統を超越するということは、大多数の論者の共通認識であった。龐朴は「五四を継承し、五四を超越する」[11]と提唱し、湯一介は「中国文化を中国に向かわせ、世界文化を中国に向かわせる」[12]と提案し、張岱年は「総合し創造する」[13]と提案した。これらは、文化討論における理性的精神の表れである。勿論、様々な原因によって、例えば文化理論の不備、あるいは他の非学術的要素の影響によって、この討論は人々が期待していた目に見えた成果を得ることは出来なかった。

八十年代以降の文化研究は、おおむね二つの段階に分けることができる。第一段階は八十年代である。この段階においては、主に中国伝統文化と現代化との関係をめぐって討論が展開され、その焦点は中国伝統文化は現代化建設の必要性に見合うものであるか否か、伝統文化は今日にあって価値を有するか否か、ということであった。この討論においては、伝統文化に対して批判的・否定的な意見を持つものが多かった。とりわけ西洋の学術思潮が大量に紹介される中で、ある種の人々は、中国社会と中国文化の現代化のために出口を探すことに汲々とするという焦燥感を抱き、現代化とはすなわち西洋化であるとした。そのため「西洋化」の論調が高まったのである。そして討論においては、政治家・感情化の色彩が比較的濃厚となってしまった。しかし、八十年代後期からは、北京大学教授羅栄渠を代表として、「西洋化から現代化へ」という比較的冷静な探求が始められた[三]。第二段階は、九十年代である。この段階では、主に伝統文化の優秀な要素を発掘し、伝統文化の経典を解釈して、「国学」が関心の中心となった。近年来の市場経済の負の側面の影響、および転換期の社会における特殊事情によって、中国大陸社会には様々な問題が出現した。社会の幾多の病弊を治すために、多くの中国哲学研究者が自らの方策を提案したのである。学者たちが比較的一致したところでは、中国伝統文化の優秀な要素を発掘することが必要だということである。なかでも、儒・道両家の思想は関心の中心となった。伝統思想文化という資源の現代的価値に関しては、論者は各人各様であったが、伝統的資源の中に合理的な要素を認め、現代化建設に適合する積極的要素を認めるということに関しては、反対する者はなかった。これは以前の、民族伝統文化を全面的に否定する虚無主義的態度から比べると、ほとんど天と地ほどの隔たりがある。総体的には、伝統文化に対する肯定的な意見は日増しに多くなった。しかし、「伝統文化を発揚する」という漠然としたスローガンの下で、文化研究は玉石混淆の状態となってしまった。多数の論者は伝統文化を民族文化建設の資源とみなし、現代的意識を持って詳察し、掘り起こし、「創造的転化」を進めることに努めた。しかし、論者の中には、伝統文化を、不変的で善美を尽くした完全なものとみなし、伝統に回帰することを宣揚する者もあったのである。更に甚だしくは、儒学を復興するというスローガンを掲げ、伝統文化が現代中国の新たな文化価値体系の直接の来源だと考え、半分の『論語』だけで天下を治めることができるとする者すらあったのである。出版社の大多数が、伝統に分析を加えぬまま多くの古典集を世に出した。その結果、白話本、文白対照本、全訳本、節訳本、注釈本、影印本、縮印本等が七花八裂する奇妙な事態となったのである。伝統文化の中の様々な汚泥が、「神秘文化」、「民族文化」、甚だしくは「優秀文化」の桂冠を被せられ、市場経済時代の文化の舞台に登場した。こうした状況は、伝統文化を現代化するのではなく、伝統文化によって「現代を教化する」ものであった。

このようなことはあったものの、文化研究の主流は依然として健康的であった。その重要な表れは、多くの論者が八十年代

の文化研究の経験・教訓を総括した基盤の上に立って、着実な研究を開始したということである。過去の、大きくはあるが空虚な論題は次第に除かれ、空疎な学風は矯正された。「平和と発展」をめぐる世界的な主題は、市場経済という条件下における文化建設と密接に結びついており、学者は、古今東西の融合衝突を軸として、人物研究・思潮研究・通史研究・断代史研究・学派研究・特定テーマ研究・特定書籍研究に、それぞれ深く分け入って探求した。研究の視野についていえば、世界的な見識がさらに広くなり、世界的な意識がますます強くなった。研究の態度についていえば、巨視的研究・中間的研究・微視的研究が一斉に進められ、なかでも中間的研究と微視的研究は日増しに増加し、とりわけ巨視的と微視的との結合、中間的と微視的との結合というテーマの比重はますます大きくなり、成果も多くなった。

### 5、文化哲学研究

八十年代後期になると、中国伝統文化を総合的に論述し探求する著作が現れてきた。これらの著作は、思想的次元から文化探求を進め、さらに中国哲学を重視したために、学術界から文化哲学研究という範疇に属するとみなされた。

歴史的側面から言えば、理論的角度から中国伝統文化を解釈した著作が多い。なかでも、李宗桂の『中国文化概論』（中山大学出版社、一九八八年）は代表的な成果の一つである。この『中国文化概論』は、中国大陸において一九四九年以降に出版された初めての、中国文化に対して巨視的に総体的に体系立った探求を進めた著作であり、また高等教育機関における中国文化概論の最初の教材となった。同書は中国文化の変遷と画期、中国文明発展の特殊な道のり、中国封建社会の経済構造と政治構造の基本的特徴、中国伝統文化の主体内容、核心、類型、特色、理想的人格、価値傾向、社会心理、思惟方法と基本精神に対して、比較的体系立った論述と分析を行っている。同書は出版後、幾度も重刷され、すでに六万冊余り発行されており、国内外でも注目され好評を博し、台湾では繁体字版（新学識文教出版中心、一九九一年）が出版され、韓国では韓国語訳（東文選出版社、一九九一年）が出版された。また同書は「中国図書賞」、「全国優秀図書賞」、「教育部優秀教材賞」を獲得した。九十年代に入ると、張岱年・方克立主編による、全国の主要大学の若手研究者が参加した、『中国文化概論』（北京師範大学出版社、一九九四年）が出版された。同書の執筆、編集に参加したのは葛剣雄・郭斉勇・李宗桂・楊国栄・頼永海・樊和平・莫礪鋒・張法・房徳鄰等である。同書は中国文化の歴史的地理的環境、経済的基礎、社会的政治的構造、中国文化の発展の歴史的過程、多民族文化の融合と中外文化の交流、中国の言語・文字と典籍、中国古代の科学技術・教育・文学・芸術・史学、中国の伝統的な倫理道徳、中国古代の宗教・哲学、に対してそれぞれ章を立てて詳述している。また中国文化の類型と特色、中国文化の基本的精神、中国伝統文化の価値体系、中国伝統文化の近代に向かっての転換等の問題に対する解釈を行い、最終的に

は「社会主義中国の新文化を建設する」ことに行き着いている。各章の作者は、みな自らが担当する章の問題に対して十分に研究しており、そのためその深さはかなりのものである。しかし多くの人々が執筆・編集したことによって、「文体が完全には一致せず、内容の重複も免れていない。……一般高等教育機関の教材としては、内容が専門的すぎ、分量も多すぎるおそれがある」[45]。同書は出版後、学術界また社会の関心を呼び、重視されて、繰り返し重版された。また類似した著作としては、呂希晨の『中国現代文化哲学』（天津人民出版社、一九九三年）、馮天瑜の『中華元典精神』（上海人民出版社、一九九三年）、李中華の『中国文化概論』（華文出版社、一九九四年）がある。

理論的側面から論ずるなら、文化と哲学、文化と価値、文化と実践の間の関係が、研究者から重視され、そしてすでにかなりの成果があがっている。許蘇民の『文化哲学』（上海人民出版社、一九九〇年）、司馬雲傑の『文化価値哲学』（山東人民出版社、一九九一年—一九九五年）、陳筠泉・劉奔主編の『哲学与文化』（中国社会科学出版社、一九九六年）等の専門書が、代表的である。こうした著作の出版は、文化理論の建設に対して、また中国哲学研究の深化に対して、促進作用を及ぼした。同時に、それ以前の、単純に外国の文化人類学の理論に依拠して、文化理論の枠組みを建設しようとし、文化史研究を進めようとする偏向に対する矯正ともなったのである。

## 6、現代新儒家研究

二十世紀後半の中国哲学研究の重要な内容のひとつは、現代新儒学（香港、台湾、海外では「当代新儒学」と呼ばれる）に関する研究である。八十年代中期から九十年代中期にかけて、方克立（前南開大学教授、現中国社会科学院研究生院院長）と李錦全（広州中山大学教授）が主導した「現代新儒学思潮研究」チームの精務によって、現代新儒学は大陸の学術界に次第に広く知られるようになり、学術研究のなかでも著名なもののひとつとなった。方・李両氏が主導した研究チームは、二十ちかい主要大学と研究院の人々からなるもので、若手の学者が中心であった。この研究チームがすでに出版している成果としては『現代新儒家学案（上・中・下）』（中国社会科学出版社、一九九五年）、『現代新儒学研究論集（一・二）』（中国社会科学出版社、一九八九年、一九九二年）、『現代新儒学研究叢書』（二四巻、遼寧大学出版社、天津大学出版社、近刊）、『現代新儒学輯要叢書』[46]、および方克立の論文集『現代新儒学与中国現代化』（天津人民出版社、一九九七年）がある。これらの成果の出版、およびそれに応じて展開されたその他の学術活動は、両岸三地（大陸・台湾・香港）の学術連係の橋渡しとなり、学者間の理解と友好を深め、中国哲学研究の成果を豊かなものにしたのである。注意すべきは、現代新儒学研究の高まりのなかで、三つの異なる動向と研究に関する思惟方法が現れたことである。第一は、客観的な学術思潮の整理、学術成果の発掘という角度から、学術理論の探求を主とするもので、現代新儒学思潮に対し

て分析的研究を進めるものである。第二は、盲目的に現代新儒学思潮に同調するもので、近代以降の学術発展の大勢と現代新儒学思潮についてほとんど知るところがないにもかかわらず、現代新儒学の理論がいかに素晴らしいかを宣揚するものであり、大陸の現代新儒家などと自任するものである。第三は盲目的に現代新儒家と現代新儒学思潮とを批判するもので、近代以降の学術発展に対し、ただ単純に政治的次元からしか理解せず、現代新儒家の論著に対しても無理解で、不正確な政治的直感を拠りどころとして議論し、結論を下すもので、甚だしくは大陸の現代新儒学を研究する学者をも現代新儒家だと言いくるめるようなものである。後者二つの研究動向と思惟方法は、実質的には一種の感情的な表現なのである。こうした状況から分かるように、学術界のある種の人に関しては、学術研究が真に科学的になり、感情的に鬱憤をはらすための道具ではなくなり、あるいはまた政治的経済的利益を得るための手段でもなくなるには、いまだ時間を必要としているのである。

### 7、中国人文精神研究

近年の、汚職腐敗、麻薬売買、売買春、強盗詐欺といったような、道徳および行為規範の喪失という厳しい情勢に直面して、学術界は強く「中国文化の人文精神の再建」を唱え、人文精神に関する討論を展開した。討論に参加した学者は、中国哲学専攻の研究者だけではなかったが、その着目するところは中国哲学の基本的精神と現代的価値という点に集中していた。今までに出版された著作としては、郭燦の『中国人文精神的重建』(湖南教育出版社、一九九三年)、李錦全の『人文精神的承伝与重建』(広東人民出版社、一九九五年)、李宗桂の『伝統文化与人文精神』(広東人民出版社、一九九七年)、王暁明編纂の討論集『人文精神尋思録』(文匯出版社、一九九六年)等がある。現在進行中の、人文精神方面に関する研究に至っては、その数は非常に多い。国家教委が主宰した全国高等教育機関「九五」人文社会科学研究計画項目指針の中には、「中国伝統哲学の人文精神」が取り上げられ、すでに多くの学者が深く着実な研究を進めており、多くの基礎的成果をおさめている。人文精神建設に関する研究は、実質的には中国哲学研究の現実に対する反映である。それは二つの指向として現れている。第一には伝統的哲学精神に対する再認識と現代的掘り下げであり、第二には現代社会に対する精神的引き上げと理性的先導である。このことが表しているのは、中国哲学研究が大陸の社会においてますます重要な地位を占めるようになったことである。注意すべきは、人文精神問題に関する討論の中で、ある論者が、中国伝統文化には元来人文精神などないとし、ない以上は、どう「再建」するのか、と指摘していることである。また次のように考える論者もいる。すなわち、人文精神にも価値区分を行う必要がある。今日、発揚し建設しなければならないのは「優秀な人文精神」であると。このような論断、とりわけ人文精神に「優秀」と非優秀の区別をつける「高論」は、人文精神建設の研究をしている学者にとって、真剣に考え厳粛に回答すべきものであ

る。

中国哲学研究者の「精神文明」研究に対する関心については、時流に迎合し、生産文化のゴミを重んずるような「陋儒」を除いて、論者は基本的にみな、異なる階層の人々のために安身立命の道を建てることから出発し、新たな価値体系の確立のために立論しているのである。重視すべきは、多くの研究者の精神文明建設に対する関心は、往々にして意識的無意識的に、思想の触角を中国伝統文化へと伸ばすものであり、「中国伝統文化と現代精神文明」との有機的結合を求めるものだということである。こうした状況を例えるなら、伝統思想文化が現代を照らす光となっているのである。注意すべきは、研究者のなかには中国の伝統的道徳の中から、現代の精神文明へのできあいの解答を見つけ出そうとする者がおり、甚だしくは伝統的道徳と現代文明を等しいものとする者までいるということである。

## 8、中国哲学通史と断代史研究

二十世紀後半二十年の中国哲学研究は、上述の成果の他に、全体的に見て、通史研究、断代史研究、特定テーマ研究、特定人物研究、特定書籍研究、資料整理、辞書編纂等の面からも成果があった。

中国哲学通史研究に関しては、代表的な著作としては、馮友蘭の『中国哲学史新編』、任継愈主編の『中国哲学史』、任継愈主編の『中国哲学発展史』、馮契の『中国古代哲学的邏輯発展』（上・中・下、上海人民出版社、一九八三年−一九八五年）、蕭萐父・李錦全主編の『中国哲学史』がある。これらの著作は、すべて専心的な研究の賜物であり、中国哲学史の研究・宣伝・普及のために、中国哲学研究の人材育成のために、中国哲学精神の解釈と高揚のために、重要な作用を果たしたのである。

馮友蘭の『中国哲学史新編』は、九十年代になって完成をみた。全七巻であり、第六巻までは人民出版社から出版され、第七巻はまず香港中華書局から一九九二年に『中国現代哲学史』として出版され、後に広東人民出版社から一九九九年、同様に『中国現代哲学史』の名で出版された。同書は、蔡仲徳氏によれば、「馮氏が晩年、自己に回帰し、『修辞は誠実』で『広々とした天空を自ら飛』んだ産物である」(5)。馮友蘭の『中国哲学史新編』は出版後、国内外の学術界の広い関心と重視を呼んだ。その評価については各人各様であり、毀誉相半ばといったところである。「学術が多く変遷したことを驚かれるなら、興亡のことまで訪ねて欲しい」、「優れたものを追求して中庸を道とし、旧を明らかにすることで新を補う」、「三史は古今を解釈し、六書は貞元を記すものである」というような、馮友蘭の耳慣れた「ことば」は、彼の心の声をよく反映しているといえるだろう。馮友蘭に対する評価はかなり複雑な問題であるが、いずれにせよ、二十世紀後半二十年における馮友蘭の研究成果は、中国哲学の民族化と現代化に対して積極的に貢献したということができる。任継愈主編の『中国哲学発展史』は、中国哲学史を中華民族の認識史とみなし、中国哲学発展の輪郭と軌跡とを描写し分析することを重視し、「中国哲学の論理の発展過

程に着目し」[88]、一連の独自な見解を明らかにした。すでに出版されている四冊（先秦巻、秦漢巻、魏晋南北朝巻、隋唐五代巻）は、中国哲学研究にとって重要な価値を有している。馮契の『中国古代哲学的邏輯発展』は、すでに大学の教科書になっており、独創的精神に満ちた学術書である。同書は哲学史の研究方法と、中国古代哲学思惟の歴史的発展における論理的変遷の論証とに関して、人々の耳目を一新させた。同書の重要な特徴のひとつは、中国伝統哲学に特有の智慧に対する深い掘り下げである。馮契は「哲学とは哲学史をまとめるものであり、哲学史は哲学の展開である」という観点を、同書において生き生きと体現している。

時代別哲学史の研究については、代表的な著作として、銭遜の『先秦儒学』（遼寧教育出版社、一九九一年）、金春峰の『漢代思想史』（中国社会科学出版社、一九八七年）、孔繁の『魏晋玄談』（遼寧教育出版社、一九九一年）、侯外廬等主編の『宋明理学史』（上・下、人民出版社、一九八四年－一九八七年）、張立文の『宋明理学研究』（中国人民大学出版社、一九八五年）、蒙培元の『理学的演変』（福建人民出版社、一九八四年）、『理学範疇体系』（人民出版社、一九八九年）、陳来の『宋明理学』（遼寧教育出版社、一九九一年）、石訓等の『中国宋代哲学』（河南人民出版社、一九九二年）、蒋国保等の『清代哲学』（安徽人民出版社、一九九二年）、馮契の『中国近代哲学的革命進程』（上海人民出版社、一九八九年）、呂希晨の『中国現代哲学史』（吉林大学出版社、一九八四年）がある。これらの著作の出版は、中国哲学史の通史的研究を、また中国哲学史の人物研究を、より深化させるものであった。

## 9、特定テーマ、特定人物、特定書籍、総論的研究

特定テーマ研究については、さらに百花繚乱の様相を呈している。主な代表的著作としては、張豈之主編の『中国儒学思想史』（陝西人民出版社、一九九〇年）、趙吉恵等主編の『中国儒学史』（中州古籍出版社、一九九一年）、龐朴主編の『中国儒学』（全四巻、東方出版中心、一九九七年）、熊鉄基等の『中国老学史』（福建人民出版社、一九九五年）、方克立の『中国哲学史上的知行観』（人民出版社、一九八二年）、方立天の『中国古代哲学問題発展史』（上・下、中華書局、一九九〇年）、蒙培元の『中国哲学主体思惟』（東方出版社、一九九一年）、夏甄陶の『中国認識論思想史稿』（上・下、中国人民大学出版社、一九九二年、一九九六年）、丁偉志・陳崧の『中体西洋之間』（中国社会科学出版社、一九九五年）、陳来の『古代宗教与倫理――儒家思想的根源』（三聯書店、一九九六年）、李存山の『中国気論探源与発微』（中国社会科学出版社、一九九〇年）、李志林の『気論与中国伝統思惟方式』（学林出版社、一九九〇年）、祝亜平の『道家文化与科学』（中国科学技術大学出版社、一九九五年）がある。この他にも、儒家の心性学説、中国哲学の本体論、中国哲学史上の人性論等に関する専門書がある。

特定人物研究についても、大きな成果がある。上述した『中国思想家評伝叢書』、『「大思想家与中国文化」叢書』、『中国大

哲学家研究系列』の他に、主な代表的な成果としては、辛冠潔・蒙登進ら主編になる、多くの著者の合作による『中国古代著名哲学家評伝』（斉魯出版社、一九八〇年）、『中国古代著名哲学家評伝（続編）』（斉魯出版社、一九八二年）、『中国近代著名哲学家評伝』（斉魯出版社、一九八二年）、匡亜明の『孔子評伝』（斉魯出版社、一九八五年）、蔡尚思の『孔子思想体系』（上海人民出版社、一九八二年）、楊沢波の『孟子性善論研究』（中国社会科学出版、一九八八年）、劉笑敢の『荘子哲学及其変遷』（中国社会科学出版社、一九八八年）、翟大華の『荘学研究』（人民出版社、一九九二年）、周桂鈿の『虚実之弁——王充哲学的主旨』（人民出版社、一九九四年）、陳来の『朱熹哲学研究』（中国社会科学出版社、一九八八年）、東景南の『朱子大伝』（福建教育出版社、一九九二年）、陳来の『有無之境——王陽明哲学的精神』（人民出版社、一九九一年）、張立文の『走向心学之路——陸象山思想的足跡』（中華書局、一九九二年）、郭斉勇の『熊十力思想研究』（天津人民出版社、一九九三年）等がある。このような特定人物研究は、八十年代初期という時代条件の制約を受け、その時代性を刻印されているが、しかし総体的には、鮮やかな個性的特徴をそなえた、各論者の長期にわたる研鑽の賜物である。

特定書籍研究についても、瞩目に足る成果をおさめた。代表的作品としては、邱漢生の『四書集注簡論』（中国社会科学出版社、一九八〇年）、辛冠潔等主編になる、多くの著者の合作による『中国古代佚名哲学名著評述』（全三巻、斉魯出版社、一九八五年）、牟鐘鑑の『「呂氏春秋」与「淮南子」思想研究』（斉魯出版社、一九八七年）、銭玄の『三礼通論』（南京師範大学出版社、一九九六年）等がある。

この他、特定テーマ、人物、書籍研究の中間に位置する総合的な著作として、例えば李沢厚の『中国古代思想史論』、『中国近代思想史論』、『中国現代思想史論』（人民出版社、一九七九年—一九八七年）がある。李沢厚の学術観点に対する評価は、国内においては大変意見が分かれているが、事実に基づいて客観的にみるならば、李沢厚のこの「三論」は、国内外の学術界に大きな影響を及ぼし、二十世紀後半二十年における中国哲学研究に対して、無視できない推進作用を有していた。さらに総論的著作の中で影響が深かったものとしては、問題中心の構成をとった、張立文の『和合学概論——二一世紀文化戦略的構想』（上・下、首都師範大学出版社、一九九六年）がある。同書では、和合（調和）が中国文化の人文精神の精髄であり最重要の価値であるとしている。作者は中国哲学と中国哲学史とを統一し、中国哲学を中国哲学史の上昇とみなし、中国哲学史を中国哲学の展開とみなして、中国哲学の新体系を構築することを原動力とすることで、現代の中国文化が直面している挑戦に応え、中国文化の現代化の実現を目的とし、独特な文化発展に関する戦略理論を提出した。同書は出版後、国内外の学術界に重視され、大きな影響を与えた。

ここでとくに言及しなくてはならないのが、特定テーマ、書籍研究の中間に位置する「周易」研究である。周易研究の興隆

は、八十年代の文化研究に始まり、九十年代には最高潮に達した。『周易』は伝統儒学の経典である「十三経」の筆頭として、文化討論が高まりを見せるなかで、人々から重視された。一九八四年、武漢大学および湖北省社会科学院等の呼びかけによって、武漢大学において「中国周易学術討論会」が開催され、十カ国以上の国々から二百余名の学者が参加した。その後、周易に関する国際学術会議から、全国的学術会議、省規模の学術会議、地区規模の会議に至るまでが、次々と開催された。周易研究が重視された程度、周易研究の参加者の多さ、社会的影響の大きさは、中国哲学史の領域における他のどの特定テーマ、書籍に関する研究も及ばないものであった。しかし、八十年代の周易研究が比較的理性的な段階に属していたとするならば、九十年代の周易研究は、大きな錯誤の中に落ち込んでしまったといえるだろう。『易経』と『易伝』とを明確に区別しないような人物が、「周易研究」を豪語していたり、さらに甚だしくは、科学の旗を振り回し、学術研究の名を借りて私利私欲を謀る者もいたのである。周易と予測学だの、周易と相性だの、周易と風水だのといった荒唐無稽な論が巷間に溢れ、中国哲学史研究の名声に極めて悪影響を及ぼしたのである。とはいえ、厳格で客観的な学術研究も多く、成果も大きかった。なかでも、著名な周易研究専門家である、山東大学教授高亨の『周易大伝今注』(斉魯書社、一九七九年)、『周易古経今注』(中華書局、一九八四年)、北京大学教授朱伯崑の『易学哲学史』(全四巻、華夏出版社、一九九四年)、吉林大学教授金景芳・呂紹綱の『周易全解』(吉林大学出版社、一九八九年)、中国人民大学教授張立文の『周易思想研究』(湖北人民出版社、一九八〇年)、『帛書周易注訳』(中州古籍出版社、一九九二年)、山東大学教授劉大鈞主編の『大易集要』(斉魯書社、一九九四年)、武漢大学教授蕭漢明主編の『医易会通精義』(人民衛生出版社、一九九一年)、湖北大学教授羅熾の『中華易文化伝統導論』(武漢出版社、一九九五年)等々は、みなそれぞれに特色ある厳格な著作である。この数年来の状況に基づいてみると、おおむね周易研究の学術的動向と発展の趨勢は、伝統文化研究と現代文化構築という角度から、啓蒙的な研究を進めるものだということが出来よう。

### 10、資料整理と辞書編纂

資料整理に関しては、「文革」以前と比べると、長足の進歩を遂げた。北京大学哲学系中国哲学教育研究室は『中国哲学史教学参考資料(上・下)』(中華書局、一九八一年―一九八二年)をまとめ、方克立等は『中国哲学史論文索引』(全五巻、中華書局、一九八六年―一九九四年)をまとめ、方克立・王其水は『二十世紀中国哲学』(華夏出版社、一九九五年)を編纂し、「当代哲学叢書編委会」は『今日中国哲学』(広西人民出版社、一九九六年)を編纂した。また中国社会科学院編纂出版の『中国哲学年鑑』(中国大百科全書出版社、哲学研究雑誌社)は、一九八二年に始まり、今日に至るまで、毎年出版されている。

辞書編纂についても大きな成果がある。張岱年主編の『中国大百科全書・中国哲学史』(中国大百科全書出版社、一九八七年)、

馮契主編の『哲学大辞典・中国哲学史巻』（上海辞書出版社、一九八五年）、張岱年主編の『孔子大辞典』（上海辞書出版社、一九九三年）、方克立主編の『中国哲学大辞典』（中国社会科学出版社、一九九四年）、中国孔子基金会編の『中国儒学百科全書』（同基金会出版、一九九七年）、趙吉恵主編の『中国儒学辞典』（遼寧人民出版社、一九八八年）、黄開国主編の『経学辞典』（四川人民出版社、一九九三年）等は、みな中国哲学史を学習・研究するために有用な工具書である。

学科建設については、史料学と方法論とが重要な地位を占めた。馮友蘭の『中国哲学史史料学初稿』を引き継いで、張岱年は『中国哲学史史料学』（三聯書店、一九八四年）を出版し、劉建国は『中国哲学史史料学概論』（上・下、吉林人民出版社、一九八三年）を出版した。前述の張岱年が出版した『中国哲学史方法論発凡』（三聯書店、一九八四年）もまた学科建設における重要な成果である。この他、国内の修士課程・博士課程を設けるほとんど全ての大学において、史料学と方法論のカリキュラムが開設され、また近年「『中国哲学史史料学』体系の完美」[19]が提案されて、中国哲学史の学科建設における近代化のための比較的堅実な基盤が築かれた。

### 11、宗教研究

ここで指摘しておきたいのだが、現行の国内学科区分においては、旧来「中国哲学」学科に含まれていた仏教・道教等が分かれて、「宗教」学科に帰属し、そのため「哲学」学科と併設されているが、しかしこれらは相当長期にわたり「中国哲学」学科に属していたことを鑑みると、やはりここでその成果を簡単に紹介する必要があるだろう。主なものとしては、任継愈主編の『宗教辞典』（上海辞書出版社、一九八一年）、『中国仏教史』（全八巻を予定、一・二巻は出版済み、中国社会科学出版社、一九八一年、一九八五年）、方立天の『仏教哲学』（中国人民大学出版社、一九八六年）、『中国仏教与伝統文化』（上海人民出版社、一九八八年）、呂大吉主編の『宗教学通論』（中国社会科学出版社、一九八九年）、頼永海の『中国仏性論』（上海人民出版社、一九八八年）、郭朋の『漢魏両晋南北朝仏教』（斉魯出版社、一九八六年）、『隋唐仏教』（斉魯出版社、一九八〇年）『明清仏教』（斉魯出版社、一九八五年）、石峻・楼宇烈・方立天等編纂の『中国仏教思想資料選編』（全三巻、中華書局、一九八一年―一九八七年）がある。道教に関する著作としては、任継愈主編の『中国道教史』（上海人民出版社、一九九〇年）、卿希泰主編の『中国道教史』（全四巻、四川人民出版社、一九九六年）、卿希泰の『道教与中国伝統文化』（福建人民出版社、一九九二年）、牟鍾鑑等の『道教通論――兼論道家学説』（斉魯出版社、一九九一年）、胡孚琛の『魏晋神仙道教』（人民出版社、一九八九年）等がある。

### 12、少数民族哲学研究

喜ばしいことに、これまで研究が不足し、何らの成果もなかった少数民族哲学史研究は、二十世紀後半の二十年において

多くの成果を挙げた。主なものとしては、伍雄武等主編の『中国少数民族哲学史』（安徽人民出版社、一九九二年）、『彝族哲学思想史論集』（民族出版社、一九九〇年）『納西族哲学思想論集』（民族出版社、一九九〇年）等がある。少数民族哲学研究に成果が得られたことは、旧来の中国哲学研究の領域を広げ、人々の中国伝統哲学に対する認識を深め、中国哲学研究の成果を豊かにするものであった。

### 13、中国哲学と自然科学との関係の研究

　旧来の中国哲学研究は自然科学を重視しなかったために、自ずから中国哲学と自然科学との関係についての研究を重視せず、あるいは完全に無視してきた。こうした状況は、二十世紀後半の二十年にいたって改善された。すでに得られた成果としては、前述の蕭漢明の『医易会通精義』の他に、劉長林の『「内経」的哲学和中医学的方法』（科学出版社、一九八二年）、李甲の『中国古代哲学和自然科学』（中国社会科学出版社、一九八九年）、張栄明の『中国古代気功与先秦哲学』（上海人民出版社、一九八七年）、周瀚光の『伝統思想与科学技術』（学林出版社、一九八九年）、王慶憲の『中医思惟学』（重慶出版社、一九八九年）、邱鴻鐘の『医学与人類文化』（湖南科学技術出版社、一九九三年）、馬伯英の『中国医学文化史』（上海人民出版社、一九九四年）、黄崙の『医史与文明』（中国中医出版社、一九九三年）等がある。こうした著作の出版は、中国哲学研究領域の開拓にとって、中国伝統哲学と伝統文化の研究を深化させることにとって、大いに積極的な意義を有している。

　総体的には、二十世紀後半二十年の中国哲学研究は、思想が開放され、方法は多元化し、大きな成果を挙げ、それ以前の八十年間の成果を遥く超えるものであった。しかしながら、もちろん、なかには明らかに不足した部分もあった。具体的には次のようなことである。第一に、中国哲学の働きに対する認識が比較的一面的であった。すなわち単に思惟を訓練するための道具と見なしたり、あるいは精神文明建設のための実用的手段とみなしたり、あるいは西洋文化に抵抗するための盾とみなしたり、さらに劣ったものとしては、売名のための道具とみなしたりしたのである。第二に、学科建設における科学性の不足である。哲学史、思想史、文化史、学術史の間の境界については、十分に科学的で、誰もが認めるような境界がなく（これは上述の研究成果からもみて取れる）、中国哲学の範囲・対象は、表面上は整理されてはっきりしているようにみえるが、実際に研究を進める段になると依然として曖昧模糊としているのである。第三に、独創的な思想および著作の不足である。評論的、参考的、解説的な著作は多かったものの、真に哲学的な次元から中国哲学に対する研究を展開し、中国哲学史の次元から哲学理論を理解し、向上させるような著作は少なかった。第四に、中国哲学の大家の育成が十分に重視されなかった。哲学家でありまた哲学史家でもあるという学者は極めて稀であったということができる。これらは皆、新世紀において研究を実践するな

かで改善していくことが待たれるのである。

### 三、百年間の成果と不足

二十世紀の中国哲学研究の状況を総体的にみると、その道のりは曲折し、しばしば難儀したといえるが、研究者の苦闘によって、最終的には大きな成果を挙げ、世界のなかで無視できない地位と影響力を持つようになったのである。

二十世紀の中国哲学研究は、中国社会・文化が伝統から現代に向かう転換と一致するものであった。言い換えれば、中国哲学研究は、中国社会・中国文化の現代化と一致することで、得られた成果も大きなものとなったのである。

その成果を具体的に挙げると、第一に、中国の伝統的な学術史観と方法論の限界を乗り越え、近代的な学術理論と規範とを用いて中国哲学を研究するという新たな局面を切り開いたことである。二十世紀においては、胡適と馮友蘭が代表的であるが、西洋のプラグマティズムと新実在論とを中国の伝統的学術研究のなかに根付かせ、西洋哲学の理論と方法とに対する中国学術界の眼を開かせ、伝統的学術の刷新および伝統的研究方法の変革を推進した。一方、侯外廬、杜国庠、楊栄国、蔡尚思、張岱年、任継愈、馮契等を代表とする学者たちは、マルクス主義を用いて中国哲学を研究し、学術研究の新局面を開いた。さらに彼らは、西洋哲学の観念と方法とを用いて研究した学者と区別されると同時に、伝統的学術領域における唯心史観、儒家的道統論を批判することを通じて、旧来の、経典を尊び、聖人を崇拝し、経書を唯一のものとする経学的思惟とはっきり一線を画し、マルクス主義による中国哲学研究の枠組みを創り、中国文化・哲学の近代化のための基盤を創造したのである。

第二に、長期にわたる研究の実践を通じて、初めてマルクス主義を主導として、中国哲学・西洋哲学・マルクス主義哲学の三者を突き合わせて、互いに学び、中国社会・文化の近代化のために思想的資源、精神的原動力および知的後押しを提供するという、研究における思想的進路を定めたことである。さらに新世紀における中国哲学の研究、および中国哲学自身の健康的発展に資する基盤を創造したことである。

第三に、それ以前とは比べものにならないほど多くの成果を挙げたことである。百年間で、先秦から近代さらには現代に至るまでの、中国哲学の人物・学派・思潮・著作ないし概念・範疇・名詞・術語が、研究者によって仔細に整理され、その特徴、法則、歴史的影響およびその限界、またその現代的意義が努めて探求された。これらの成果は、その方法、観点あるいは内容、価値を問わず、すべて昔日の比ではない。

第四に、現代的な意味における中国哲学学科を創設したことである。長期にわたる非常に困難な努力を通じて、経験教訓を総括し、中国哲学はひとつの独立した学科として、また現代的な意味における学問として、確立されるに至った。胡適、馮友蘭から、張岱年、任継愈に至るまで、さらには近年に卒業した中国哲学専攻の博士・修士に至るまで、それぞれ貢献するとこ

ろがあったのである。

第五に、中国哲学すなわち中華民族の独自の価値と精神的資源を発掘し、中国哲学を世界に認めさせたこと、そして世界の民族が拮抗しあうなかで、中華民族が独立するために、また偉大な中華文明を復興するために、貢献する力となったことである。

もちろん、包み隠さずにいうならば、百年間の中国哲学研究においては、明かな不足と弱点が存在している。それを概括すれば次のようになる。

第一に、西洋哲学の理論・方法に対する盲目的信奉と鵜呑みである。西洋哲学の価値尺度によって中国哲学を量り、西洋哲学の方式によって中国哲学を組み立て、また解体し、中国哲学の歴史的事実と実践条件から乖離して、概念から概念へ、理論から理論へと向かった結果、空虚化・虚無化という弊害が現れた。これらの弊害の問題点は、文化の世界性・普遍性に気を取られて、民族性と時代性を無視してしまうことにある。

第二に、マルクス主義を硬直的に、教条的に理解して、マルクス主義を政治的レッテルとして、また人々を打ち据える棍棒として用い、中国哲学の実際の状況を顧みなかったことである。そして生き生きとして、活気に満ちた中国哲学を、いわば無味乾燥な数本の筋になるまで裁断してしまい、中国哲学の民族性と時代性とを否認し、同時にまた中国哲学の世界的意義をも否定してしまったのである。

第三に、学術と政治との関係の把握が不正確であったため、多くの悲劇を招いたことである。もとより、学術研究は事実を離れることは出来ないし、政治を離れることも出来ない。しかし如何に生活に参与し、関与したか、あるいは冷静な頭脳を保持し、批判精神を堅持したかは、後日、その実践を回顧することによって総括されるべきである。馮友蘭、楊栄国等の悲劇的教訓は記憶されるべきである。

第四に、学科区分がいまだ科学的でなく、学科の特質が十分に鮮明でなかったことである。ひとつの独立した学科として、中国哲学はすでに成立してはいるが、しかし科学的に厳密な角度からみると、完成までにはさらなる歩みが必要である。中国哲学と中国哲学史とは本来次元を異にする概念であるが、近年の実情としては、多くの人が往々にして混同している。甚だしくは、何をもって「中国哲学」とみなしているのかが、事実上不明確な概念になっているものまである。この他、研究を進めるなかで、如何にして「広範化」しつつも雑駁にならず、「純化」しつつも空虚にならないようにするかが問われている。「広範化」のなかで哲学思想を向上させ、「純化」のなかで人文精神を展開し、思惟を高めるものが、優れた研究・探求の名に値するのである。

第五に、学術的な大人物が少なかったことである。この百年間、様々な要因が障害となって、学術的環境は理想的とはいえず、中国哲学の研究領域においては大家と呼べるような人物の輩出は少なかった。真に中国および西洋の学に通じ、哲学家でありながら哲学史家でもあるような学者は、非常に稀であり、我々の民族の歴史的文化的伝統と、我々の百年来の、偉大な中

華文明復興への努力・希望との間には大きな「落差」があるのである。

第六に、中国哲学研究の人文環境が十分に良好とはいえなかったことである。中国哲学は精神的境地の向上を重視し、人文環境の構築を重視し、天地のために心を立て、民のために道を立て、往聖のために絶学を継ぎ、万世のために太平を開くことを重んずる。こうした準則に基づいて、中国哲学研究者はより高い境地に至るべきである。しかし、市場経済の負の要素の影響によって、また伝統文化のネガティブな要素の影響によって、中国哲学研究という集団の内部での、ある場所・場面においては、あるべき良好な雰囲気が欠けているのである。派閥は作っても学派を作らず、仲間内では助け合いながら異分子を排撃し、利益のみを追求し、甚だしくは手段を選ばず、無学無能の輩と何ら異なる所が無いという状況は決して珍しくはない。こうしたことが、学術集団の団結に影響し、中国哲学を務めとする集団のあり方に影響し、さらには優秀な成果の出現を妨害するのである。

以上このような不足あるいは弊害は、新世紀において研究を実践していくなかで、中国伝統哲学の優れた伝統を用いて、次第に解決していかなくてはならない。

## 四、新世紀の展望

二十一世紀において、中国哲学研究は、新たな局面を迎えるだろう。

まず、中国哲学はひとつの独立した学科として、その体系は次第に完成され、次第に厳密になり、学科としての特徴がより鮮明になるだろう。そこでは何が「中国哲学」かなどということはもはや問題にならないだろう。中国哲学・中国哲学史という二つの概念は、少なくとも研究者の頭の中では、明確に区別されたものとして、いわば潜在意識のようになり、いちいち分析して想起する必要はなくなる。中国哲学の研究と中国哲学史の発展との間の関係は分析によって十分に明確になり、全ての中国哲学研究者の共通認識と個々人の思惟の前提となるのである。

次に、研究者全体の努力を通じて、中国哲学の民族性が十分に解き明かされるだろう。そして中国哲学の時代的意義と世界的意義を際だたせ、経済のグローバル化という高波にも押し流されることがないだろう。

さらに、中国哲学研究の観念と方法はより多元化し、学術見解もまたより多元的になり、「万物並育して相い害さず、道並行して悖らず」という伝統的理想が、現代的条件の下で生き生きと現実化するだろう。中国のものか外国のものかに関わらず、伝統的か現代的かに拘わらず、根拠を有し理にかなった研究だけが、中国哲学の発展進歩を促進し、中華民族の精神生命の向上を促進して、ふさわしい尊重を得ることができるのである。

最後に、中国哲学の研究はさらに世界規模になり、世界の、

中国哲学に対する研究はより深く豊かになり、それらが相互交流するなかで、中国哲学の研究水準は大幅に向上するだろう。

未来の研究の進路についていえば、おおむね三つに分けることができる。第一に、生活に参与し、現実に関与することである。この進路をとる研究者は、現実をよく認める態度を保持することはもちろん、同時に厳しく批判する態度をも保持しなければならない。そして精神文明建設、現代文化建設に向かい、中国と西洋を対比し古今を照らし合わせることを基本方法とし、自らの中国哲学観を明らかにして、社会の進歩を促進しなければならない。第二に、学理を重んじ、「グローバルな視座」に立って問題を見つめることを提唱し、中国哲学研究を国際的な学術研究の規範の中に組み入れて、国際的な学術界との「交接」を重視することである。この進路をとる研究者は、学問の純粋性を強調し、学術と政治との分離を強調する一方、他方では学術的立場から政治に対する見解を表明し、ある程度は政治のために「貢献」しなくてはならない。政治に依拠して自らの学術的見解を普及させる可能性も排除してはならないのである。第三に、主体意識を高め、独自の哲学的見解を提出し、自らの哲学体系を構築することである。この進路をとる研究者は、おおむね馮友蘭・熊十力・牟宗三といった哲学家を模範とし、古今東西の思想を徹底的に考究することに努め、最終的には「一家の言を成す」ことを目指すべきである。そして、どの進路をとる研究者であっても、歴史を担い、時代への責任を負っているという自覚に立って、中国的気風・気概をそなえた現代的な新哲学体系を作りあげるために尽力しなければならない。全体的な趨勢から考えると、未来の中国哲学研究は、多元並立し、それぞれが競い合うものとなるだろう。過去におけるように、政治が学術に取って代わり、あるひとつのモデルが研究の規範となるような時代は、もはや再び訪れることはないだろう。同様に、過去の、自己陶酔的な孤立的閉鎖的研究方法と心理状態は、ますます多くの、ますます広範な国際的学術交流の波に洗われて、開放的になり、相互連関的になり、研究は共同規範を遵守するものになるだろう。要するに、未来の中国哲学研究が百花斉放して変化に富んだ場になることは、付和雷同せずに文化を融合・更新することの、自然な歴史的プロセスであり、論理的な帰結である。

注

(1) 二十世紀の開始年度に関して、中国では官民共に異なった「見解」が存在している。西暦二〇〇〇年は既に二十一世紀に入っているとする者もいるし、また西暦二〇〇一年から二十一世紀が始まるとする者もいる。本稿では、西暦二〇〇一年が二十一世紀の始まりだと考える。理由は簡単で、ある天文学者が指摘しているように、西暦の記述方式においては、「西暦〇年」はないからである。

(2) 張岱年「近百年来的中国哲学史研究」(『文史知識』、一九九九年第三期) 四―七頁。

(3) 同書は一九二八年には成立していた。譚戒甫はその著『公

孫竜子形名発微』の「後記」の中で、次のように述べている。「一九二八年に、『墨辯発微』『形名発微』が共に成った。……一九三一年、（武漢大学において）形名学を教え、講義を刊行した。」（中華書局、一九六三年八月）一七三頁。

(4) 北京大学での講義。一九二三年に記述され、一九二三年北京大学から刊行。

(5) 馮友蘭『中国哲学史（上冊）』（神州国光社、一九三一年）、『中国哲学史（下冊）』（商務印書館、一九三四年）、『中国哲学史（上・下冊）』（中華書局、一九六一年）

(6) 私立中国大学における講義、一九四三年に印刷。ただし同書は一九三六年に完成し、商務印書館も版組をし、印刷を準備していたが、抗日戦争の激化によって印刷できなかった。その後、商務印書館からは一九五八年に出版され、一九八二年には中国社会科学出版社から新版が出版された。

(7) 杜国庠『先秦諸子批判』（作家書屋、一九四九年）。当時は杜守素と署名、北京三聯書店から一九五五年に重版された際に、書名は『先秦諸子的若干研究』と改められ、杜国庠と署名された。

(8) 同書は『孔墨的思想』に続いて、一九四六年後半から書き始められ、一九四八年末には完成した。当時、楊栄国は桂林師範学院において中国思想史を教えていた。同書は一九五四年に、人民出版社から正式に出版された。

(9) 賀麟『当代中国哲学』（勝利出版公司、一九四七年）。修訂版は『五十年来的中国哲学』と改名され、遼寧教育出版社から一九八九年出版。

(10) 姜義華主編『胡適学術文集・中国哲学史（上冊）』（中華書局、一九九一年）九頁。

(11) 前掲書、一〇頁。

(12) 前掲書、一九頁。

(13) 馮友蘭『中国哲学史』（上冊、中華書局、一九六一年）一四頁。

(14) 馮友蘭『三松堂自序』（三聯書店、一九八四年）二四八頁。

(15) 馮友蘭『新理学』（商務印書館、一九三九年）、『新事論』（商務印書館、一九四〇年）、『新世訓』（開明書店、一九四〇年）、『新原人』（商務印書館、一九四三年）、『新原道』（商務印書館、一九四五年）、『新知言』（商務印書館、一九四六年）。馮友蘭はこの六部の書を「貞元の際における著作」と総称していた。彼によれば、「いわゆる『貞元の際』とは、すなわち、抗日戦争期という中華民族復興の時期である。……この抗日戦争に、中国は必ず勝利し、必ず復興しなければならない。『南渡』した人々は必ず生きて帰らねばならない。このことを『貞下起元』（訳注：天道人事が往還し、往きて必ず復すること）と呼び、この時期を『貞元の際』と呼ぶのである。」（馮友蘭『三松堂自序』二八一頁。）

(16) 馮友蘭『三松堂自序』、二七四頁。

(17) 賀麟『当代中国哲学』、三五頁。

(18) 正確に計算するならば、一九四九年から一九七八年までは、

最初と最後の年を含めてちょうど三十年である。一九七九年から二〇〇〇年までは、二十年以上あるが、ここでの二十年とは概数である。同様に、一九四九年を境界として、二十世紀の中国哲学研究をおおむね前後五十年で区切ることもまた概数である。

(19) 李宗桂「唯政治思想的危害及其産生原因」(『新華文摘』、一九九二年第一一期)九―一一頁。

(20)『哲学研究』編集部編『中国哲学史問題討論専輯』(科学出版社、一九五七年)

(21) 林可済「要以階級闘争為綱学習和研究中国哲学史」(『福建師大』、一九七六年第二期)

(22) 張捷「孔子——反動階級復辟的工具」(『浙江日報』、一九七三年九月二四日)

(23) 姜涛「戳穿孔子反革命両面派的醜悪嘴臉」(『遼寧日報』、一九七二年一二月二九日)

(24) 鐘哲文「儒法闘争是両条路線的激烈闘争」(『南方日報』、一九七四年七月一七日)

(25) 侯外廬・趙紀彬・杜国庠らの『中国思想史』は全五巻である。第一巻は、侯外廬・趙紀彬・杜国庠の名で、一九四七年に上海新知書店から出版され、一九五七年に人民出版社から再版された。第二・三巻は前記三人に邱漢生を加え、一九五〇年に三聯書店から出版、一九五七年に人民出版社から再版された。第四巻(上・下分冊)は侯外廬の主編により、人民出版社から上冊は一九五九年に、下冊は一九六〇年に出版された。第五巻は侯外廬の名で、一九五六年に人民出版社から出版された。

(26) 全て人民出版社から出版。第一巻は一九六三年、第二巻は一九六三年、第三巻は一九六四年、第四巻は一九七九年にそれぞれ出版。この教材の執筆、編集に携わったのは、中国科学院哲学研究所・北京大学哲学系中国哲学史教研室・中国人民大学哲学系中国哲学史教研室等の組織に属する研究者である。(王明、尹明、孔繁、石峻、鄧艾民、盧育三、任継愈、荘印、孫長江、呉則虞、李炎、容肇祖、湯一介、楊憲邦、楼宇烈。)

(27) 任継愈主編『中国哲学史』第一巻の「再版説明」(人民出版社、一九六四年)、二頁。

(28) 任継愈主編『中国哲学史簡編』(人民出版社、一九七三年)。同書の解説によれば、執筆・編纂には、孔繁、汝信、任継愈、李沢厚、林英、鐘肇鵬、楼宇烈が携わった。

(29) 馮友蘭『中国哲学史新編』(第一巻、人民大学出版社、一九八〇年修訂版、一九八二年第三版)、「自序」一頁。

(30) 中国社会科学院哲学研究所哲学史研究室編『中国哲学史方法論討論集』(中国社会科学出版社、一九八〇年)

(31) 楊栄国主編『簡明中国哲学史(修訂本)』、「序言」、一、二、七頁参照。

(32) 金春峰「唯心主義在一定条件下起進歩作用」、「対唯心主義要具体分析」、「作為哲学思想発展前進的一個環節的唯心主義」(『読書』第一、二、三期、一九八〇年)、方立天「評

唯心主義在社会史上的作用」(『人民日報』、一九八〇年七月一八日)、王樹人「関於唯心主義在一定条件下起進歩作用的問題」(『人民日報』、一九八〇年八月一八日)、包遵信「再談歴史上哲学唯心主義的評価問題」(『哲学研究』、一九八〇年第九期)参照。

(33) 肖箑父・李錦全主編『中国哲学史』(上冊、人民出版社、一九八二年)四—一一頁。

(34) 李宗桂「相似理論・協同学与董仲舒的哲学方法」(『哲学研究』、一九八六年第九期)

(35) 張紹良「研究中国哲学史上的範疇和重要概念」(『光明日報』、一九八一年四月三〇日)

(36) 湯一介「論中国伝統哲学範疇体系的諸問題」(『中国社会科学』、一九八一年第五期)一五九—一七二頁参照。

(37) 岳華編「関於研究中国伝統哲学範疇問題的討論」(『中国社会科学』、一九八二年第一期)五三—五七頁参照。

(38) 「筆談中国哲学史範疇研究(一)」(『求索』、一九八四年第一期)五七—六九頁参照。「筆談中国哲学史範疇研究(二)」(『求索』、一九八四年第二期)六〇—六七頁参照。

(39) 馮友蘭は『中国哲学史新編』(第一冊、人民出版社、一九八二年)の「自序」のなかで、「哲学史には様々な書き方がある。狭義の哲学を専門的に論ずるものもあるし、哲学者の生涯およびその政治的社会的環境に重きをおいて論ずるものもあるし、哲学者の性格を重視して論ずるものもある。……『新編』においては、ある哲学者の哲学体系を述べるだけでなく、また彼がおかれた政治的社会的環境についても述べている。そのため慎重さを欠き乱雑になったきらいがある。しかしもしそのために、この『新編』が哲学史を中心として中国文化に対して明らかにする所のある著作となることができているならば、望外の幸いである」(二—三頁)と述べている。実際、馮友蘭はその期待した目的を達したというべきだろう。『新編』はたしかに哲学史を中心として中国文化を詳述した、特色ある哲学史の著作である。

(40) 李宗桂『文化批判与文化重構——中国文化出路探討』(陝西人民出版社、一九九二年)参照。

(41) 龐朴『稂莠集』(上海人民出版社、一九八八年)参照。

(42) 湯一介『中国伝統文化中的儒道釈』(中国和平出版社、一九八八年)二七五—二七七頁。

(43) 張岱年『文化与哲学』(教育科学出版社、一九八八年)、「自序」、一頁。

(44) 羅栄渠主編『従「西化」到現代化』(北京大学出版社、一九九〇年)参照。

(45) 『中国文化概論』、四八七頁。

(46) 方克立・張品興主編『現代新儒学輯要叢書』(一五巻、中国広播電視出版社、一九九二年—一九九六年)。梁漱溟、熊十力、馮友蘭、賀麟、方東美、銭穆、馬一浮、張君勱、唐君毅、牟宗三、徐復観、余英時、杜維明、劉術先、成中英を収録。

(47) 蔡仲徳「校勘後記」（馮友蘭『中国現代哲学史』所収）、二七八頁。

(48) 任継愈主編『中国哲学発展史』（先秦巻、人民出版社、一九八三年）四頁。

(49) 商聚徳「関於完善『中国哲学史史料学』体系構想」（『河北大学学報』、一九九四年四月）

（り・そうけい　中山大学教授・孔子基金会理事

※原著論文は「二十世紀中国哲学研究的審視和新世紀的展望」『学術界』、二〇〇二年、第一・二期）

（ほんま・けいすけ　筑波大学大学院人文社会科学研究科）